

第5回島田市総合計画審議会 会議要録

1 日時

令和3年6月4日（金）19：00～20：40

2 場所

島田市役所 4階 第三委員会室南・北

3 出席者

委員：池上委員（会長）、村田委員（副会長）、磯崎委員、大池委員、小栗委員、河村委員、北川委員、クラーク委員、鈴木(史)委員、鈴木(将)委員、中根委員、萩原委員、原委員、渡瀬委員

市側：牛尾副市長

事務局：今村市長戦略部長、中村戦略推進課長、興津係長、中村主査、永田主事、酒井主事、榊原主事

傍聴者 1人

4 内容

（開会）

（会長あいさつ）

- ・久しぶりに皆さんとこうやって会うことができるととても嬉しく思う。
- ・前回話をしたときに非常に記憶に残っているのは「ゆるキャン△」の話。高度成長期を経て大人になった人間としては、効率を求めてどんどん大きくなってどんどん速くなって、という価値観がいいものだと思って生きてきた。ところが今の若者たちはそうではなく、「ゆるキャン△」のようなゆったりとした時間をゆるく過ごす、壮大な自然を仲間とともに愛でながら語りあう、そういう暮らしこそ幸せなのだという価値観の中で生きている。そのような新しい生きざまみたいなものは、実は島田のこの自然の中にたくさんあるということを改めて感じた。「ゆるキャン△」が示したような生き方が、島田の未来を考えるときにすごく大きなヒントを与えるのではないかと考えていた。
- ・今皆スマホを持ってコンピュータを使って世界中とつながってという時代である一方、それと逆のような価値観が今一度見直されている、そういう時代なのではないかと思う。何が本当に大切なのだろう、何を譲れない線として大事にしていかなければならないのだろう、そういうことを今一度立ち戻って、今日の会議をやってきたい。
- ・今日最も重要なのは、後期基本計画の重点事項について話す資料4である。その柱について、皆さんそれぞれの御活動の場所・知見から、こうするといいのではないか、あるいはこういう視点も盛り込めばいいのではないか、ということをごひいただければと思う。
- ・その柱が固まってくればおのずとの中身も固まってくる。その意味では、今日の話は大きな方向性を定める最後の機会、重要な位置づけの機会になろうかと思っている。

(委嘱状交付)

組織の人事異動等に伴い新たに委員になられた2名に対し委嘱状を交付
市長あいさつ、新委員あいさつ、事務局自己紹介

(報告)

(1) 後期基本計画の体系について

資料1に基づき、興津係長より説明

(2) 市民意見の聴取について

資料2に基づき、榊原主事より説明

【質疑応答】

A 委員：資料1 9ページ 4-3-2「水資源を保全します」という名称で、書いてある内容は下水道の下水のこと。水資源とは排水をきれいにすることなのかと疑問に思う。

資料1 11ページ 5-2-2 フィルムコミッションの支援についても項目を入れてほしい。

事務局：水資源の方については、水循環の中で自然に戻す水をきれいにして戻していくことを行政として力を入れていくところと考え、し尿の処理や浄化槽の設置の促進といったことが主な取り組みとなっている。

シティプロモーションのところにフィルムコミッションをという御指摘については、取り組みの中に入れていく。

会長：資料1 12ページの「島田を応援してくれる人を増やします」、とてもいい表現だと思う。今年、しまだ大井川マラソンが復活するということで、島田のマラソンはものすごく応援が温かく、ありがたい。

島田のマラソンで初めてフルマラソンを走る人が実は結構いる。その人たちが声援に背中を押されてゴールまでたどり着く。そういう人は島田に応援してもらったから、今度は逆に島田を応援しようという気持ちになると思う。そこをうまく仕掛けを作っていけば、まさに関係人口の取っ掛けりになってくるのではないかと考えている。

B 委員：資料2について、高校生アンケートの結果がでている。なかなか厳しい結果、特に(3)の満足度について、3.4%というのは相当低いのではないかと捉えている。高校生ワークショップを今度やるということなので、このあたりも意識してワークショップの組み立てを考えてもらえると嬉しく思う。ヒントをここでつかんでもらえるとありがたい。

事務局：市内の事業所のヒアリングにおいても、なかなか高校生と業者が知り合う機会がない、知ってもらえる機会があまりないということで、行政に支援をしてほしいという意見をいただいた。そのようなことも計画の中で書き込んでいこうと

考えている。

B 委員：ある会議で、島田市内の高校生は市内の企業に就職している率が高いという話を聞いた。一方ではそういうこともあるので、この満足度が低いのが引っかかる。

会長：まず、「働きがい」ということについて、高校生が持っているイメージがどういうことかを解きほぐすことは大事なのではないかと思う。

都会で働いているイメージがおそらく高校生の働きがいのように思うのだが、実際には島田で働いている人たちの中に働きがいを感じる人は多い。ただそういう幸せを感じている人と高校生の接点がない。ここに大きな原因があるかと思う。

私は県の「才徳兼備の人づくり小委員会」の委員長をやっており、その小委員会の重要なミッションが「地域と高校の接続」である。静岡県の高校教育のレベルで、地域の企業と高校生がつながっていくことを大きな柱として進めていくので、県の動きと連携しながらやっていくと良いのではないかと。

高校生は、島田でいきいきと働いている人の姿を見ていない。目の前にいきいきと働いている人がいて、その人が目を輝かせてこんなに面白いよと話をすれば、高校生なりに刺激を受ける。そのような機会を広く作っていくことが大事かと思う。

事務局：島田市としても、市役所と市内に5つある高校、商工会議所、商工会、観光協会と連携協定を結んでいる。この協定に基づき、高校生が市内の企業を紹介するラジオ番組を作ったり、行政が学校の授業をお手伝いさせていただいたりしている。

(議題)

(1) 後期基本計画の施策と内容について（政策分野1から5まで）

資料3に基づき、中村主査より説明

【質疑応答】

会長：今の時代、市や県が総合計画をつくるとき、SDGsとの関連性を盛り込む。Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標などと言われ、全部で17ある。

また「めざそう値」というのはあまり耳慣れない言葉だが、これもSDGsで出てきているKPI達成の目標となる値のことをいう。それをこの島田の場合は、「めざそう値」として書いていると御理解いただければと思う。事前にお目通しいただいて何か御発言があれば今この場でお願いしたい。

C 委員：3-5、「地域の魅力を生かした観光振興」の観光の部分。島田を含め、静岡の中部地域でどんなものがあるかと聞かれたとき、なかなか県外の人に向けてここが売りだと言にくいところがある。その中で唯一、県外の人々の注意をひくのがいわゆる大井川鐵道のSL。この観光のところを見たときに、蓬萊橋や川越し街道など歴史的なものも入っているが、この地域の観光のキラーコンテンツ

であるSLまたは温泉施設、県外から見たときに目につくそれらがこの観光の分野のところに入っていない。何か理由があるのか。

事務局：確かにSLと温泉が現在書き込みの中に入っていないので、3-5-1の中に書き加えていきたい。

C 委員：島田の全国区となると、いわゆる帯まつりとか鬮まつり、県内は当然皆さん知っているが、県外の方でも割と知っている大きな行事で、歴史的な意味もあると思う。分野5以降に出てくるのかもしれないが、それらについては市民も非常になじみがあって、誇りに思うイベント、歴史ある行事だと思う。これらについてはどこかで記述はあるか。

事務局：お祭についても3-5-1の地域資源の一部になろうかと思うので、書き加えていきたい。3-5-1が全体的に抽象的な書き方になっているので、今いただいたような具体的なものを書き加えていきたい。

D 委員：資料3 政策分野と主要な取り組みがほとんど似たような内容となっている。主要な取り組みではもっと詳しく書いてあるかと思ったら、ほとんど同じである。具体性を持って書いた方がよいのではないだろうか。また、これから4年間、誰が進めていくのか。行政だけでなく市民も企業も一緒になってやっていく。「こういうことをやる」と具体的な書き方で、徹底的に書き込んでもいいのではないか。

事務局：確かに主要な取り組みの書き込みがまだ薄いので、内容を増やしていきたい。誰がやるのかについては、市民の方と事業者と行政と、この3者が協働してまちづくりを進めていかなければならないと思っている。これは市民の方にやっていただきたい、事業者の方にやっていただきたいというところも、書けるところは書いていきたい。

B 委員：最近の国の取り組みの中で「ヤングケアラー」ということを取り上げている。若い10代の子どもたちが実際に介護をしていると、いろいろな支障が出ているということが述べられている。

「ヤングケアラー」については、まだこれからの取り組みになってくるかと思うが、例えば新聞等が出ていたように、神戸市などもうすでに相談窓口を設置して取り組みを始めているところもある。

これからの力になる若い方々のケアというのが必要になってくるのではないかと思うので、「ヤングケアラー」という言葉をどこかに入れる検討をしていただければと思う。

事務局：とても大切なところであると思うので、書き加えていくように担当部署と調整していきたい。

会長：どうしても介護される側の話に力点が置かれがちだが、介護する側の視点、その人たちが抱えるしんどさや大変さにもちゃんと行政として向き合っていく姿

勢が今後ますます求められるということで、ぜひ「ヤングケアラー」という言葉は入れていただければと思う。

E 委員：3-2「世界に誇れる技術を持った中小企業を育てる」非常に素晴らしい題目だと思うが、右側のページに「付加価値の高い地域産業を創出します」がある。他の1、2は非常にわかりやすいが、この3が少し抽象的かなと思う。抽象的だとやはり人に伝わらないのではないか。例えば「やりがいのある会社を誘致します」など、具体的に言ってもいいのではないかなと思う。

会長：具体性を持った内容を総合する言葉を考えると抽象度が高まるというジレンマの中で、この表現なのかなとも思う。

事務局：今いただいた課題を持ち帰り、もう一度小柱のタイトルを検討したい。

会長：確かに「付加価値」という言葉は普段日常的に使う言葉でもないので、もう少しわかりやすい言葉を考えてみるといいのかもしれない。

B 委員：3-1 地域経済に関する小柱について、資料1の方で見たときには感じなかったが、資料3の形になると、小柱が2つというのが少し寂しいと思う。資料4でも産業をがんばるポイントであげていることを見ると、もう一つぐらい何かないか。前期の計画を見たときに3つ載っているが、2番目の「経済活動の輪を広げていきます」という小柱があって、主体の連携ということを挙げている。そういう視点の小柱は作れないか。

事務局：中身についての回答は次回とさせていただきたい。このページに限らず、レイアウトについてはまだ深めていない。例えば1つずつ左右のページに載せて、図や写真を入れるというところは今後進めていく。

(2) 後期基本計画で示す重点事項について

資料4に基づき、興津係長より説明

【質疑応答】

F 委員：「がんばるポイント」の1、「安全・安心で、楽しく暮らせるまちを創る」の項目の都市づくり、コンパクトシティに対する考え方について、具体的にどういうことか教えていただきたい。

事務局：前回の審議会でも、「コンパクト・プラス・ネットワーク」という言葉がわかりにくいのではないかなという指摘をいただいている。具体的にはこの「コンパクト・プラス・ネットワーク」は政策分野6の都市基盤の分野で出てくるため、まだ皆様に資料をお渡しできていない。

「コンパクト・プラス・ネットワーク」を簡単に説明すると、人口減少が進む中、皆散らばって生活するのではなく、拠点・中心のところに皆で集まってそこで暮らしていきましょうという考え。その拠点同士をつなぐものが公共交通になる。

会長：エリアの中核的な集落にまとまって住むような形で、その集落と集落を公共交

通機関で結ぶような、そういう暮らしをみんなで行っていきませんかという提案と理解してよいか。

事務局：その通り。

C 委員：総合計画の前期からキーワードに挙げている縮充だが、あまり聞いたことがない。この縮充については前期の市長のコメントに書いてあるように、人口も減ってそれによって税収も減って、予算も人も少なくなる中で、選択と集中によっていいものをつくっていこうという話。

私が読んだ本によると、もう一つのキーワードとして、住民の参加、参画、協働があった。人も予算も少なくなるようなときだからこそ、住民の参加や参画、協働によって、行政だけじゃなく住民参加によって豊かにしていこうという考えが縮充のために必要だということが書かれていた。

今回ここには選択と集中だけだが、一方で受ける側からすると、今のコンパクトシティにも通じるが、少し冷たい響きがある。限りがあるのでもうこれはやめます、あれもこれもという時代ではないからこっちをやめてこれに集中します、というものなので、考えようによっては冷たい響きがある。

もしその選択と集中をやるにしても、住民が納得し、自分たちが参画して、自分たちで決めて、選んだものに集中投下しようというものならいいが、役所の方で決めて、こっちはやりません、こっちはやりますというのは非常に辛い。市の総合計画なので、参画等は当たり前だから書いていないということかもしれないが、もう少し、縮充との絡みでそういったところを前面に書けばどうかと思う。

会長：選択と集中をせざるを得ないのだけれども、誰がそれを決めるのか。当事者たちが自分たちのあり方を主体的に決めていく、社会参画の仕組みを作って自分たちの主体性のもとに、「これはやらない。これはもう続けない」というような選択をすれば、そこに納得・共感が生まれるのではないか。そうなる選択と集中というキーワードはもちろん必要だが、そこに主体性を発揮する市民の参画ということも書き込んではどうだろうかという指摘である。

事務局：縮充は、今の島田市を未来に引き継いでいくためには避けて通れないということで、今回、前期よりもさらに大きく出していきたいと考えている。実行していく中で、役所が勝手に決めたということは絶対にいけないと我々も思っている。住民参加、協働の要素を書き加えるように検討していきたい。

会長：キーワードの一つのDXという言葉。資料4の1ページ目は「デジタルの力で市民生活をもっと豊かにします」と書いてあり、2ページにはもう少し詳しく書かれているが、それでもやはり何だかよくわからない。確かにコンピュータでいろいろつながるのは便利になるだろうと思うが、それが市民の暮らしの向上とどう関わってくるのかということについて、皆さんはどんなイメージを持っているか。

例を挙げると、先週末、私たちの大学で、移民政策学会の年次大会をやる予定だった。対面でやる予定がコロナの状況により全面オンラインに変更になった。皆集まれなくて残念な一方、思わぬ良い副産物をもたらした。

以前は、国際セッション発表者は1つか2つだったが、今それがどんどん増えてきて、そのセッションの司会になった人は今アメリカにいる、ベルを担当する学生は浜松にいる、発表者はオーストラリアにいる、ということが平気で成立する。あるいは、九州の大学院生が浜松でとなると、やはり旅費をかけて来なければならないが、それがなくなるので、非常に発表の心理的、財政的敷居が低くなっていく。

これまでは、ある程度旅費もあって発表しやすい人たちが集まっていたが、より多様な人たちが学会の場で発表し合うようになってきた。これはすごく豊かになったことだと感じている。

では、今の島田の総合計画の文脈で、デジタルトランスフォーメーションを進め市民生活がもっと豊かになったときに、どんな豊かさが私達の前に展開するのだろう。御自分の分野など思い浮かべて、「こんなことで、新しい未来を開くのではないか」といったコメント・指摘があれば伺いたい。

G 委員：今、自治会の方でも、パソコンやインターネット回線が入ってきて、これからZoomを使って自治会役員の会議もできたらなというところまで踏み込んできた。

今の自治会役員は年齢の高い人が多いので、なかなか入っていけないところがあるが、これから役員になる方はそういった環境に馴染んでいると思うのであまり心配をしていない。そういったことで自治会も変わりつつある。

先ほど高校生の仕事の話が出た。5月の静岡新聞に、伊東市と島田市の高校生の代表者が話し合う中で、「働く場所が限られる」ということが載っていた。これからの未来につながる仕事をつくるというところで、具体的などんなものがあるのか、高校生に知ってもらうことは本当に大事なことだと思う。

高校を卒業して県外へ出た子どもたちが、いかに戻って来られるかということは、生活の基盤となる働く場所がないと成り立たない。それとやはり住んで良かった、戻ってきて良かったという生活環境も必要になってくると思う。そういうものいかに作り出すか。

冒頭にゆるキャン△の話がされた。私も戦後生まれの高度成長を過ごした人間なのでどちらかというと活力を求める考え方が強いが、冒頭の話聞いて少し緩やかな視点で考えるのも必要と思った。

会長：二つ目の論点の方は高校生がやはり地元の良さ、特に働く環境の中で、あまりそこでいきいきと働いている人を見てないというところが大きな問題だと思う。その出会いの場をどう作っていくかということなのかなと思う。

一つ目の論点は、自治会活動などでもデジタルトランスフォーメーションのおかげで今後変わっていくだろうということ。

学会の話でもう一ついいことがあって、それは子育てをしている人がZoomで顔も出さずに音声も出さなければ子どもを抱きながら学会のシンポジウムを聞ける。多様な人たちが参加しやすい環境が、実はデジタルの上で実現していく。それまでは男の人たちが集まる場であった自治会が、多様な人が参画する場合に変わっていくのではないかということも、デジタルで開かれる新しい未来かもしれない。

H 委員：リッチモンドと島田は都市提携して今年60周年。こういう時期なので、本当なら面と向かってリッチモンドの方と一緒に何かやりたいねと言っていたが、なかなかそれができないのでリモートでやることにした。どんなふうにするか、向こうの方とこちらの役員とZoomで会議をして詰めている。

こちらの思いは、若い人たちとの交流。若い人同士の交流をすることが、将来プラスになるのではないかとということで、できれば中学校を借りて、学生の交流をリモートでできればいいねということを計画している。

これができるのは、市内全校にWi-Fi設備、どこからでもリモートでできるような設備が整ったということが非常に大きい。そういうことで、子どもたちや向こうの方たちとの交流が深まっていくのではないかと思った。

リッチモンドの方たちも、こちらと産業で交流をしたいという希望がある。今は子ども同士・役員同士の交流だが、これが企業との仲介役となり、企業同士が連携し合っていければ、とても豊かになると思っている。

会長：子どものつながり、役員をつながりやをベースとしながら、企業同士がつながっていく関係に展開できないだろうか。

生身の人間を訪問するのは、アポを取ったり飛行機や宿を取ったりと大変だが、オンラインだと気軽にパッとつながれるというメリットも確かにある。DXで島田の企業が外とつながっていく、特に世界とつながっていくような可能性をより広げていけないだろうかという指摘をいただいた。

I 委員：デジタルの世界は少し冷たいようなイメージもあるのかなと思っていた。私はこちらに移住して、今友達がたくさんできたが、そのできた友達というのはほぼSNSでつながってできた友達。

Zoomなどオンラインで初めて顔を合わせた後、オンライン上で話が盛り上がり、やはり生身で会いたいと言って関係が濃くなるのが結構ある。そのような効果があることを、デジタルに少し拒絶反応がある人たちに伝えられたらいいと思っている。

会長：関係人口を増やしていくときの取っ掛かりとしてデジタル上のつながり、フェイスブックやインスタグラム、そういったものが有効ではないか。

J 委員：子育て世代だが、子ども手当等の書類をわざわざ提出しなければいけない、もしくは郵送で送ることもできるが、その準備をすることすら面倒なので、入力

するだけで終わるとか、手続きが簡略化される。また、自治会の話が先ほどあったが、集金にわざわざ1軒1軒回っている方や自治会長、とても大変だとおっしゃる方が多い。例えばPayPayなどで一括送金できるようになると、一軒一軒回らなくてもいいし、回覧板も回さなくてよくなるので手間がすごく省ける。子育て世代は自治会のことまで回らない方も結構多いので、手間を省けるのが大きいかなと思う。

高校生の話では、わざわざ職場の人がいて輝いているところを見るのは現実的ではないと思うので、輝いているところをデジタルで見せることもPRにつながるのではないかな。

就職先だけでなく、行政の政策の中で高校生へのPRが全体的に少ない。例えば結婚資金。今後の少子化のことにもつながるが、お金のない世帯や若者世帯に対して、結婚資金を配布するという政策があるが、おそらく高校生は知らない。そういったことを知っているだけで、結婚したいという若いカップルの手助けになるのではないかな。

不妊治療はそもそも若い人の方が妊孕率は高い。不妊治療を始めようとなるのが30代、晩婚化しているので、30代・40代・50代となってくるとやはり成功率も少なく、費用が1000万円を超えることもあるが、知らない方が多い。それを高校生の段階で知っておくと、今後の選択が変わってくる。そういった情報提供が少な過ぎるのではないかなと思ったので、今後のライフプランを考える上で、ちゃんと高校生に伝えていってもらえたら嬉しい。

結婚に関しては、若者世代が求めているものが変わってきている。昔は3高と言われていたのが、共働きが当然の時代になってきている。

ただ残念なことに、男女共同参画の視点から言うと、女性は就職がしづらい。結婚・妊娠・出産において1回離職する率が高く、離職した後の復帰のハードルもとても高い。

良い企業と言われている企業は、育休が取れる、給料がしっかりしているはもちろんだが、定時で帰ることができる、出勤時間が選べる、在宅ワークが選べるというのも視点の一つとしてあると思う。そこを求めている高校生や若い世代も多いと思う。育休が100%取れる、給料はそこまで高くなかったとしても福利厚生がすごい、そういった強みを企業の方からアピールできたらと思う。

給料がどうしても下がってきているので、共働きができない限り厳しいところが多い。女性の就職が増えない原因が、御主人等の協力が得られない、早く帰って来られないということがあるので、共働きできるように、定時で帰れるようにするなど男女が平等に働ける社会を目指していかないと、今後厳しいのではないかなと思う。また、そのようなことをすることで有能な人材の確保につながるという研究結果も出ているそう。

3-1の「地域で働く人を増やし…」のところに2つの柱があった。3つめの柱を作るのであれば、「男女ともに平等で働きやすい社会をつくりまします」という文言を入れていただけると嬉しい。

- 会 長：企業に限らないと思うけれども、もっとそういう足元の良い働く環境を高校生たちにも伝えていくといいのではないか。それから、高校生は直接あんまり関心がないのだけれども実はいろいろなサポートがあるので、そういうことも島田にいと使えるという話を伝えていってはどうかという意見。
- K 委 員：デジタルというとやはりネット環境だが、実際に今私がお店を開いているところは島田のネットが来ていない。微弱なWi-Fiは通っているが、実際にそこでZoomができるかということやはり携帯を使わなければならない。
今住んでいるところもやっとネットがつながり始めた。結局パソコンが1台配られても私は子どもにそれを教えてあげることもできない。
市がデジタルを目指すのであれば、市民一人一人がネット環境に取り入れられるような社会をつくっていただきたい。できれば「ネット月額全て無料にします」などがあつたらいいなと思う。
- 会 長：デジタルインフラの整備があつて、初めてつながることができる。
今、年齢が高い人も頑張つてつながっている。何か刺激があればやるし、自治会活動もZoomで会合ですよと言えやると思う。孫の写真を見ることがいちばんの動機づけとなる。
- 事 務 局：先ほど縮充について協働の視点も必要ではないかと御指摘をいただいた。前期基本計画の28ページを御覧いただきたい。将来像を実現するための役割ということで、市民、事業者、行政がどのようなことをやっていくべきかについて書いてある。基本構想、8年間に通じる部分となっているので、かなり重要なところに書いてあるということで御理解いただきたい。
- L 委 員：聞き取り調査によると、田舎に住んでいる人の生活は大変で不便と言われている。だから田舎に住みたくないのだろう。でも私はありがたいことがいっぱいある。
DXでは、例えば去年のコロナ関係の補助金。私はインターネットで申し込んだ。遠い場所に住んでいるが、DXで早くその補助金をいただくことができた。そういう制度が増えたら生活がだんだん便利になる。田舎に住みたいと思う人が増えればいいと思う。
- 会 長：遠いところに住んでいてもデジタルで便利になったという意見。先ほどの縮減をしていく上でも、デジタル環境を整備することで、便利さにつながっていくというところは表裏の関係として大事なのもかもしれない。
- M 委 員：DXについて商工会を例にとると、コロナ前は多くのイベント等をやってきた。これがコロナで全て中止。その中で何ができるかといったとき、今まで足し算をしてきたものを、引き算をすることによって、6回の景気回復策をやってきた。金中跡地のドライブインシアター、全てチケットはLINEで購入いただ

いて、非接触型でやることができた。また金曜日だけテイクアウトフライデーということで飲食の方にテイクアウトの商品を売っていただいた。これも全て、LINEでチケットを買っていただいた。

このように、コロナがなければきっとやらなかったであろう、ある意味副産物が出ていくことを、このコロナをきっかけとして発見することができた。

高校生のことについて、島田の経済団体と行政の提携が結ばれているが、商工会議所の青年部・商工会の青年部も、高校に行き講師という形でリアルな若い方たちに企業の生の意見をお話しさせていただいている。これからも広げたいと思っている。

会 長：デジタルの社会はコロナの縛りがあるからいろいろと工夫が進んだ。

(その他)

(1) 後期基本計画策定スケジュールについて

資料5に基づき、中村主査より説明

【質疑応答】

・なし

会 長：今日の資料でまだ言い足りないことや、持ち帰って考えてみたらこのことを言ったらよかったということがあると思う。それをぜひ事務局にお伝えいただきたい。事務局はこのあと作業を進めていくので、なるべく早いうちにお気づきの点などを事務局にお伝えいただければと思う。
子育て層のワークショップと高校生ワークショップは行こうと思っている。そこでの知見なども事務局にフィードバックしていきたい。

以上

20：40会議終了